

台灣人學習者之連接詞「-temo」習得狀況 —以 LARP at SCU 分析—

彥坂春乃

東吳大學日本語文學系博士生

摘 要

本稿使用「LARP at SCU 語料庫 2022」，針對台灣人日語學習者於日文作文中使用連接詞「-temo」情形進行用法分類、適切性評估，以及使用狀況之縱貫分析。以期透過本稿分析結果增進連接詞「-temo」之習得成效。連接詞「-temo」在日語學習中，屬於初級後半之文法學習項目。然其用法具有多樣性，被認為是在初級難以習得之文法項目。根據本稿之分析，連接詞「-temo」之使用次數在第三學年上學期前呈逐步成長之趨勢，往後雖略為減少，但錯誤率亦下降；而不自然之使用情形約為 5%。「-temo」之用法以逆接條件最常見，其中，用於非假定內容之使用頻率較假定內容更高。不自然之使用則是可以分為以下四種情形：以「-tara/to」取代使用；避免需使用「-temo」之情況；受中文「負向轉移」之影響，於動詞 te 形後誤以「mo」連接；「demo」與「-temo」之混淆。為使中文字母語話者於「-temo」之習得增進，本稿根據誤用項目分析提出多項教學方向建議。

關鍵詞：逆接、並列、不定化、使用傾向、習得過程

台湾人学習者の接続表現「ても」の習得状況 —LARP at SCU コーパスによる考察—

彦坂はるの

東呉大学日本語学科博士課程大学院生

要 旨

学習者の「ても」習得を促進するため、本稿では「LARP at SCU コーパス 2022」を用いて作文で使われた接続表現「ても」について用法の分類、適切性の判断を行い、使用状況を縦断的に観察した。接続表現「ても」は初級後半の項目であるが、その用法は多岐にわたり、初級では習得が難しいと指摘されている。調査の結果、使用数で見ると三年次上学期までは増加傾向にあるが、減少した後に安定して使われ、不自然な使用は約 5%にとどまった。使用されている用法としては逆条件が多く、仮定的な内容よりも非仮定的な内容が多く使われていた。不自然な使用においては、「たら／と」の代用としての使用、「ても」が必要ない場面での使用、母語の負の転移が原因と見られる「て」による動詞と「も」の不適切な接続、「でも」と「ても」の混同が見られた。考察を踏まえて、「ても」の習得を促進するために教育現場への提言を行なった。

キーワード：逆接、並列、不定化、使用傾向、習得過程

**Acquisition of Conjunction “temo”
of Taiwan’s Japanese Learners :
A Study Using LARP at SCU**

Hikosaka, Haruno

Department of Japanese Language and Culture,

Soochow University

Ph.D. student

Abstract

This paper is to classify the usage and appropriateness of the conjunction "temo" used in writing using the "LARP at SCU Corpus 2022." "temo" is taught in the latter half of the elementary level, but it is difficult to master due to its wide range of uses. The results showed usage increased until the first semester of the third year. After that decreased and then stabilized. Unnatural use accounted for only about 5% of the total. The inverse usage was the most commonly used, and non-hypothetical was used more often than hypothetical. In unnatural usages, the following were observed: use as a substitute for "tara/to", use in situations where "temo" is not necessary, improper connection of verbs and "te" with "mo" by the negative transition of native language, and confusion between "demo" and "temo." Based on considerations, proposals were made to facilitate the acquisition of "temo."

Keywords: inverse, parallel, indefinite, usage tendency, acquisition
process

1.はじめに

学習者が JFL 環境において専門的に日本語を学ぶ際には、四技能の一つとして書く能力が重要視されている。特に作文においては、目標言語で思考し、様々な形式の文章が書けるようになることが求められるが、その過程で学習者がどのような語彙や文法項目を選択し、どのようなエラーが見られ、それらが修正されていくのかという習得過程は注目に値すると言えよう。

学習者の産出する文は単文から従属節を含む複文へと発展していき、接続表現が見られるようになる。その中で接続表現「ても」はごく基本的な項目と見なされており、て形の後に初級後半で導入される項目であるが、学習者の使用には不自然なところがあり、安定しているとは言えないように感じられる。

「ても」は接続助詞「て」と係助詞「も」が合わさってできた形式だが、その主な用法とされている逆接の用法は、本来起こるべき事態が実現しないという場合に使われる。田中(2005)は、初級修了直前の学習者の作文において、「ても」の代わりに「たら」が使われることから「ても」は初級では習得が難しいと指摘している。逆接の「ても」は仮定的な内容以外に、すでに起こった内容も表すことができる点が特徴的であるが、後者の場合には「ても」よりも前の段階で学習する「でも」や「けど／が」などの逆接の表現形式を用いることもできる。以下の例のように「ても」を教えた後に(1)の中国語を日本語に訳すテストをした場合、(2)のように答える学習者よりも、(3)のように「ても」以外の接続形式で回答する学習者が多く見られる。

(1) (不好意思，我有個問題請教您，現在可以耽誤您的時間嗎？に続く文として) 我用網路查了也還是不懂。

(2) インターネットで調べても、わかりませんでした。

(3) インターネットで調べたけど、わかりませんでした。

(1) の日本語訳としては (3) も間違いではないが、一般常識や社会的通念を根底に「調べたらわかるはずなのにわからない」というニュアンスを表す場合は (2) の「ても」がより適している。同じ言い方を何度も使用すると不自然に感じられ、また学習が進むにつれてより高度な表現が求められることから、いかに「ても」の習得を促進するかが課題となる。

「ても」の逆接以外の用法としては、複数の条件が同じ結果になることを表す並列の用法、疑問詞とともにどのような条件でも同じ結果になることを表す用法などがあるが、教科書で主要な文法項目としては扱われていない¹。また、「と言っても」や「どちらにしても」、「泣いても笑っても」のような固定用法もある。

「ても」は初級で習う「て」と「も」が組み合わさった接続表現でありながら、その用法や表す意味は単純とは言えない。同じ「ても」を含んだチャンクとしての許可や許容の用法である「てもいい」も早い段階で導入され、広く使われる。このように「ても」の用法は幅広く、学習者の習得状況は安定していないように思えるが、その習得過程においてどのようなプロセスを経てきたかは明らかになっていない。

そこで、本稿では「LARP at SCU コーパス 2022」を用いて学習者の「ても」の習得状況を明らかにするために、学習段階ごとに作文に現れた「ても」を抽出した。本稿の分類に従ってその用法の適切性を判断し、使用状況の特徴について考察し、さらに、その問題点を取り上げ、「ても」の習得の促進するための教育現場への提言を行

¹ 本稿で調査対象とした学習者の読解の授業で使用されていた《進學日本語初級Ⅱ》では、各課の主要な文型として14課で不定詞と「でも」の用法が導入され、第18課で「と」と「ても」、不定詞+名詞+「でも」が導入される。例：あの人はどんなスポーツでもできます。不定詞と「ても」を同時に使用した例は確認できなかった。

った。

2. 先行研究

2.1 「ても」の文法的機能に関する研究

まず、「ても」の文法的機能を概観していく。田中（1988）は従来の分類を踏まえた上で「ても」を実際の用法から、仮定逆接条件、確定逆接条件、てもいい、強調の表現（慣用的用法、並列、対比、例示）、文末の慣用表現、無条件、談話に見られる機能、その他の類義的な用法に分類している。

前田（1993）は「ても」は「条件の並列（＝並列条件）」と「条件関係の否定（＝逆条件）」に大別できるとし、この二つは連続的に存在していると述べている。並列的条件として置かれた条件が通常はその結果を導かないような事態である場合に逆条件として解釈されるためである。「ても」の用法を、「テ形の並列・取り立て」、「並列条件」、「並列・逆条件」、「逆条件」の四種類に分類し、そのうち「並列条件」、「並列・逆条件」、「逆条件」の三つが、接続助詞として使われるとしている。「ても」の本質的な用法は並列条件であるが、中心的な用法は逆条件であると指摘している。

前田（2009）では、リアリティー（言語によって表された事態と現実との事実関係）の概念を用いて条件文の分類を行なっている。仮定的リアリティーはまだ起こっていない、これから起こる可能性のあることと仮に実現したとみなした実現しなかった事態を表す。非仮定的リアリティーには、前件も後件も実現した事態と繰り返し発生する事態が含まれる。リアリティーの分類の概要を表1に示す。リアリティーに関する記述は「と」、「ば」、「たら」、「なら」に多く見られ、「ても」ではあまり触れられていないが、前田（2009）の分類とリアリティー概念を組み合わせることで、仮説条件、反事実、事実条件、習慣、一般条件のように「ても」の用法を一つの枠組みで整理することができ、後の「ても」の習得に関する研究でも用いられている。

表 1 前田（2009）におけるレアリティーの枠組み

レアリティーの名称		説明
仮定的レアリティー	仮説的レアリティー	これから生起する可能性のある事態。
	反事実的レアリティー	実現しなかった事態を仮に実現したと仮定する。
非仮定的レアリティー	事実的レアリティー	前件・後件がともに事実である。
	仮定的なレアリティーとの中間的な存在	一般条件・恒常条件、反復・習慣を表す。
非条件的レアリティー		複合動詞を構成する用法、後置詞的用法。

※表は前田（2009）を元に筆者が整理したもの

非条件的レアリティーについて補足すると、「すればいい」「したらいい」などの複文とは言えない用法や「からみれば」のような後置詞的用法、「ば」の列挙の用法がここに含まれるという。「と」、「ば」、「たら」、「なら」についてしか説明されていないが、「てもいい」や「と言っても」などの用法は非条件的レアリティーに含まれると考えられる。

以下では、日本語教育の現場に向けた「ても」の説明を見ていく。庵ほか（2000）は「ても」の典型的な機能は仮定的な逆接であり、これは「のに」や「けれども」にはない用法であると述べている。「雨が降っても、風が吹いても」のように複数の前件を並べて使うことも、「何が起こっても」のように疑問詞と使うこともできる。て形に取り立て助詞の「も」がついた形であることから、後件が同一の二つの条件文を並べるときにも使え、逆接とは言えない用法もあるとしている。

庵ほか（2001）は、因果関係のうち前件と後件の関係が社会通念で予想されるものに反する場合は「逆接」となり、逆接の表現は大きく「けど」類、「のに」類、「ても」類に分けることができるとしている。「けど」類と「のに」類は事実的な逆接しか表せないが、「ても」類は仮定的な逆接を表すこともできる。「ても」は実現した出来事について使われる場合には「けど」と似た意味になるが、「ても」が複数のものの存在を含むのに対し、「けど」にはそうした含みはないと述べている。

そのほかに、日本語文法記述学会（2008）では「ても」は逆接の仮説条件を表す代表的な形式とされ、反事実条件、事実条件を表すことができると述べられている。また、一般条件に反すること、反復・習慣条件を表すことができる。「使っても使わなくても」のように肯定と否定で対立する場合や「走っても走っても」のように同じ語が繰り返される場合は、「どちらにしても／何をやっても」ということを表している。そして従属節に疑問詞が現れる場合は「どのような事態であっても／すべての事態において」ということを表す。

「ても」の用法を概観してきたが、最も一般的な用法は逆接の用法だと言えるだろう。その特徴は未実現の事態も実現済みの事態も表すことができる点である。前件に反義の関係にある語、同じ語を重ねる、疑問詞を用いることで、内包する事態の範囲をさらに広げることができる。また、「も」の元来持つ意味によって並列を表すこともある。各種の用法について習得状況を調査し、それぞれ段階での使用状況を把握する必要があると考えられる。

2.2 「ても」の習得に関する研究

以下では「ても」の習得に関する研究について述べる。

接続辞表現の習得に関する研究として峯（2007）がある。言語処理可能性理論に基づき、従属節 A 類（句）→C 類（文）→B 類（複文）の順に発達すると予測を立てて、学習者 90 名の接続辞表現の使

用を分析した。その結果、産出の負担が少ないものから使用され、事実的なものから仮定的なもの、順接から逆接へ広がることがわかった。「ても」はB類に含まれるが、逆接の「ても」の使用が遅れることが指摘されている。て形の後に導入されるが、その意味用法を習得するには時間がかかることが窺える。

続いて、中国語を母語とする学習者にとっての「ても」の困難点を明らかにしようとした研究として鄭（1993）と陳（2013）を挙げる。

鄭（1993）は中国語母語話者にとっての条件表現の困難点に着目し、日中対照の観点から日本語の条件表現を順接の仮定・確定、逆接の仮定・確定に分類し、中国語の「条件句」「因果句」「譲歩句」「転折句」との対応から考察している。その中で「ても」に関しては、仮定の逆接条件だけでなく、確定の逆接条件もある点に注意すべきだと指摘している。「ても」に対応する中国語「即使…也・就是…也」は譲歩句（前句が未然表現で後句との関係が逆接関係）にしか用いられないが、「ても」は譲歩句以外に転折句（前句が已然表現で後句との関係が逆接関係）の関係も表すことができ、対応関係にずれがあるからである。この確定の用法を使った例として（4）を挙げ、その中国語は（4）になると述べている。

（4）ひどく暑くても、誰も暑いとは言わなかった。

（5）（雖然）非常熱，但是誰也沒有說熱。

（4）は中国語では転折句として判断され、「雖然…但是・尽管…但是」を用いるのが一般的であるため、中国語話者の学習者にとって非常に理解しにくいと述べている。

陳（2013）は学習者の「ても」の不使用について、対応する中国語と、ある条件において通常起こると期待されることがらである「期待の内容」の観点から考察している。「たら」と「ても」の説明に

際して、中国語では「如果～（就）」、「即使～也～」が使われることが多く、それぞれが假定複文、譲歩複文とされる。しかし、「如果～也」という用法も見受けられ、その場合に「如果」を「即使」に入れ替えることができるが、その日本語訳において「ても」を「たら」に置き換えることはできない。つまり、中国語において「ても」にあたる要素は「也」であると言え、日本語では「ても」は前節に置かれるが、「也」は後節に置かれ、「也」は必ずしも現れるわけではないため、学習者の混乱を招くとしている。逆接の表現「ても」は、日本語では期待を覆す内容の場合に使うが、中国語においては、期待に反しているかどうかの判断は必ずしも行われるものではなく、単なる順接として解釈されることもあるため、順接と逆接の判断には困難が生じるという。仮定の「たら」は、中国語において「如果」を用いる。「ても」の文は、前節の内容がその前の文や前提から独立している条件の場合には「如果～也～」、前の文やある前提に対する譲歩、あるいは極端な例では「即使～也～」と訳されることが多いと述べている。他の可能性（期待される行為）の存在を匂わせることで、無愛想なニュアンスが加わることもあるとし、その場合は、あえて「也」を使わずに「如果」のみが使われることもあると説明している。以下(6)は「如果」の代わりに「若」が使われているが、「也」が出てこない。日本語では「ても」を使用すべき場面であるが、中国語では順接とみなされているようだと言われている。

(6) (ホテルのホームページに)

以上價格差有變動，恕不再另行通知。

そして、期待の内容から見た逆接の「ても」文を A タイプと B タイプの二つに分けている。ある条件下で当然起こると期待される事柄が起こらないことを述べるだけの場合で、期待の内容には 1 つの順接条件のみが含まれる状況を A タイプとし、教科書での説明に使

われているものである。前田（1993）から（7）を挙げ、ここでの期待の内容は「カメラは水に濡れたら壊れる」というものだと説明している。

- (7) 「このカメラ、水にぬれたらこわれてしまいますか。」
「いいえ、防水ですから、ぬれても、こわれません。」

それに対して B タイプは、期待の内容が順接の「ても」を含んでおり、順接の「ては」でも表現できるものとしている。この B タイプの存在が学習者にとっての困難点となっていると指摘している。

(8) での期待の内容は、本来の製品につめかえたら泡になり、他の製品につめかえても泡になるというものである。

- (8) （泡で出る洗顔料の詰め替え用に）
この製品は「ダヴ クリーミー泡洗顔」専用です。
他の製品につめかえても泡になりません。

宮崎（2014）は前田（2009）のレアリティー概念、陳（2013）の二タイプの期待の内容に注目し、中国語を母語とする日本語学習者の「ても」の理解について、台湾人学習者150名を対象に質問紙調査を用いた調査を行っている。日本語母語話者15名の結果と比較して学習者の「ても」の選択率が高かったのは仮説的レアリティーかつ「期待の内容」Aタイプの内容であり、選択率が低かったのは仮説的レアリティーかつ「期待の内容」Bタイプの内容、前件が事実的な仮説的レアリティーかつ「期待の内容」Aタイプの内容、前件が事実的な仮説的レアリティーで相手の期待を否定する内容、並列条件、慣用句・談話的表現であった。

以上、「ても」の習得に関する研究を概観してきたが、峯（2007）では学習者は産出において負担が少ないものから使用すること、事実的なものが仮定的なものより、順接が逆接より早く使われること、

そして「ても」では逆接の「ても」の使用が遅れることがわかった。

鄭（1993）では、「ても」に関して中国語と日本語の対応関係にずれがあること、中国語では確定の逆接条件は譲歩ではなく逆接と判断されることが指摘されているが、後者は特にその後の研究で言及される「期待の内容」と関連があるように思われる。

陳（2013）では学習者の理解上の困難点として、中国語訳にあたる「也」との対応関係と「期待の内容」の判断の有無が挙げられている。宮崎（2014）では実際に学習者が「ても」を選択できるかどうかという点について母語話者との比較から使用傾向を明らかにしているが、学習者が実際にどのような用法をどれだけ使っているかという産出の部分については言及されていない。そこで、本稿では「ても」の習得過程においてどの段階でどの用法の文が産出されているかを明らかにし、「ても」の習得の促進を目指して教育現場への提言を行うことを目的とする。

3. 調査概要

3.1 調査対象

学習者の習得状況を縦断的に確認するため、東呉大学で開発された検索エンジン「LARP at SCU コーパス 2022」を用いた。「LARP at SCU コーパス」プロジェクトの概要について以下に示す。日本語学科で学ぶ台湾人大学生 37 名が 2004 年 3 月 17 日から 2007 年 5 月 16 日までの期間（大学一年次の後期から大学四年次の後期、休暇期間を除く）、毎月 600 字の作文を書き、それについて教師によるフォローアップインタビューを行い、第二稿を作成した。その後、検索エンジン「LARP at SCU コーパス 2022」が開発され、第一稿を母語話者が添削したデータが新たに追加された。2022 年版には第一稿として 958 篇²の作文が収録されている。各回の実施時期と作文テーマを表 2 に整理した。

² 「LARP at SCU コーパス」と「LARP at SCU コーパス 2022」では 953 篇と公

表 2 LARP の作文テーマ一覧

学年	回	作文テーマ	学年	回	作文テーマ
一年 上 学 期			三年 上 学 期	16	夏休み
				17	私の愛用品
				18	旅する
				19	選挙
				20	2006 年を迎えて
一年 下 学 期	1	私の一日	三年 下 学 期	21	最近の出来事から
	2	春休み		22	スポーツ
	3	私の部屋		23	町
	4	私の夢		24	私の愛読書
	5	高校生活		25	最後の夏休み
二年 上 学 期	6	忘れられない出来事	四年 上 学 期	26	台湾のデモについて
	7	十年後の私		27	ゴミ問題
	8	もし一千万円当たったら		28	台湾の外食文化
	9	大学生活に期待すること		29	コーヒー文化
	10	私と日本語の出会い		30	台湾の野良犬
二年 下 学 期	11	お正月	四年 下 学 期	31	少子化
	12	携帯電話		32	大学生の恋愛観
	13	母の日		33	LARP に参加した感想
	14	友情			
	15	流行			

表されているが、筆者の計算では 958 篇が確認された。

「LARP at SCU コーパス」プロジェクトに参加した学習者は大学一年生から四年生までの期間に最も多い場合 33 回作文を書いているが、参加回数は学習者によって異なる。37 名の参加者のうち、33 回全てに参加した学習者が 17 名いる。本稿では縦断的な変化を見るため、その 17 名による 561 篇の作文を調査の対象とすることとした。

3.2 調査方法

「LARP at SCU コーパス 2022」において接続助詞「て」係助詞「も」の組み合わせ³からなる「ても」と「でも」の含まれる文を抽出し、そこから対象外の用法（許可を表す「てもいい」、「と言っても」）、書き間違いや濁点の欠如による誤用が含まれる例を除外して分類を行った。

本稿では「ても」の使い方に注目し、文意の判断に支障がない限り、そのほかの要素の正誤と自然さには注目しないこととした。判断の際には「LARP at SCU コーパス 2022」に掲載されている母語話者による訂正、作文データの前後文を参考に用法の判定を行った。用法の判断において一貫性と信頼性を確保するため、母語話者の日本語教師三名によって分類を行い、最終的な判断は二名以上が同意する用法とした。

以下、本稿で取り上げる学習者の実例は、「LARP at SCU コーパス 2022」のテキストデータをそのまま用いることとし、後ろに (L26-33) のように学習者番号と第何回に書かれたものかを記す。実例に続いて訂正文を示す場合は' をつけて実例の下に示す。訂正文は「LARP at SCU コーパス 2022」の母語話者による訂正を参照にした上で、必要に応じて筆者が手を加えたものである。

³ 「ても」と「でも」を含む文を対象に Web 茶まめを用いた MeCab による形態素解析を行った結果に基づく。「LARP at SCU コーパス 2022」にておいては IPAdic（現代語）を指定するよう指示がある。

3.3 分類の枠組み

学習者の使用した「ても」を用法別に分類するにあたって、庵ほか（2000）、庵ほか（2001）、そして「ても」の習得に関する研究においても分類の依拠となっている前田（1993）の分類を援用して枠組みとした。以下、表3に本調査における分類の枠組みを示す。

表3 本稿における分類の枠組み

番号	項目	各用法の定義と学習者による実例
①	並列条件	前後に出現する条件文、あるいは書き手にとって前提となる条件と帰結が変わらないことを表している場合。 例：今の私は、毎日満員電車に乗っても、暇な時でも、ずっとそれで音楽を聞きながら、リラックスしています。(L26-17)
②	逆条件 仮定 仮説	通常はその帰結を引き起こさない条件や状況によって成立する関係のうち、未実現の事態を表している場合。 例：学校を出ても勉強を続けるはずだ。(L27-33)
③	逆条件 仮定 反事実	通常はその帰結を引き起こさない条件や状況によって成立する関係のうち、起こり得ない事態を表している場合。 学習者の例が見られなかったため前田（2009）からの例： 薬を飲んで <u>でも</u> 治らなかつただろう。
④	逆条件 非仮定 事実	通常はその帰結を引き起こさない条件や状況によって成立する条件関係のうち、前件も後件も発生済みの状況を表す場合。 例：それは雨が強すぎて、傘が持っていて <u>ても</u> 体も濡れてしまったのだ。(L9-16)
⑤	逆条件 非仮定 その他	前田（2009）で仮定的なレアリティーとの中間的な存在とされる、一般条件・恒常条件、反復・習慣などを表している場合。連体修飾の内容や慣用句に近い例などもこの用例に含めた。 例：だが、自分の好きなことだから、どんな ⁴ 苦しく <u>ても</u> 、またやり続けています。(L9-10) 例：しかし、目の前に暗くなることがあつて <u>ても</u> 、前向きに進まなければいけないと思う。(L26-24) 例：たとえば、目に入れて <u>ても</u> 痛くない人形をみんなに愛されていました。(L5-15)

⁴ 不定詞が含まれていても、それがあらゆる状態ではなく極端な状態を表しており、省略しても文が成立する例は逆条件に分類した。

番号	項目	各用法の定義と学習者による実例
⑥	不定化	一つの不定詞か反義の関係にある二語の組み合わせによってどのような条件でも後件になるということを表している場合。後者は二つで一つとしてカウントした。 例：携帯を持って、どこへ行ても、連絡やすい。(L35-12) 例：(高校時代の友人について) 辛くても、楽しくても、あの人たちはいつも私のそばに勵しました。(L6-5)

前田（1993）による「ても」の四分類のうち、主に接続表現として使われる「並列条件」、「逆条件」、「並列・逆条件」から、まず「並列条件」と「逆条件」を採用し、逆条件についてはそれが仮定か非仮定か、さらに仮定を仮説と反事実、非仮定を事実とその他に分けた。本調査では、並列条件と逆条件の中間的な用法とされる「並列・逆条件」は項目としなかった。前田（1993）で提示されているような典型的な「並列・逆条件」の例は見られなかったため、文脈から考えてより近いと思われる項目に分類した。そして、上記以外にあらゆる条件を表す場合を不定化とした。

4.調査結果

「LARP at SCU コーパス 2022」を使用して「ても」と「でも」の含まれる文を抽出したところ、それぞれ 182 件と 2 件であった。「ても」が一つ以上含まれる文の数が検索結果として出てくるため、実際に使われた「ても」はこれよりも多い。「てもいい」や「と言っても」など 58 例と「ても」と関係のない誤用を除外したところ 133 例となり、そのうち 7 例が誤用と判断された。以下では「ても」の使用数を学習者、期間、用法の観点から整理し、表 4 から 6⁵に示した。図 1 では表 5 期間と用法の関係をグラフとして示した。

⁵ 表 4 と表 5 において、それぞれの学期に 5 篇の作文が書かれたが、4 年次下学期は通常の学期より短いため、書かれた作文は 3 篇のみである。

表 4 学習者個人と期間から見た「ても」使用数

期間 学習者	一年 下学期	二年 上学期	二年 下学期	三年 上学期	三年 下学期	四年 上学期	四年 下学期	計
L5	0	0	1	6	0	0	0	7
L6	1	1	1	5	0	0	2	10
L8	1	0	0	1	1	3	1	7
L9	0	3	0	3	0	1	1	8
L10	1	0	0	0	1	0	2	4
L14	1	0	1	0	2	3	1	8
L20	0	1	3	0	1	0	1	6
L21	0	2	2	1	2	2	0	9
L24	0	2	1	4	4	0	0	11
L25	0	1	2	0	0	0	1	4
L26	1	0	1	3	3	1	0	9
L27	0	2	4	1	0	3	6	16
L28	0	0	0	0	0	0	0	0
L29	0	1	1	2	0	0	1	5
L30	0	1	2	4	3	0	1	11
L34	3	0	4	1	3	2	0	13
L35	0	0	1	3	0	1	0	5
計	8	14	24	34	20	16	17	133

表 5 期間と用法から見た「ても」使用数

用法 期間	誤用	①	②	③	④	⑤	⑥	計
		並列	逆条件 仮定 仮説	逆条件 仮定 反事実	逆条件 非仮定 事実	逆条件 非仮定 その他	不定化	
一年下学期	0	0	2	0	3	1	2	8
二年上学期	0	2	2	0	3	6	1	14
二年下学期	1	1	0	0	3	14	5	24
三年上学期	1	13	2	0	4	13	1	34
三年下学期	1	1	1	0	4	8	5	20
四年上学期	3	3	1	0	2	3	4	16
四年下学期	1	2	3	0	3	4	4	17
計	7	22	11	0	22	49	22	133

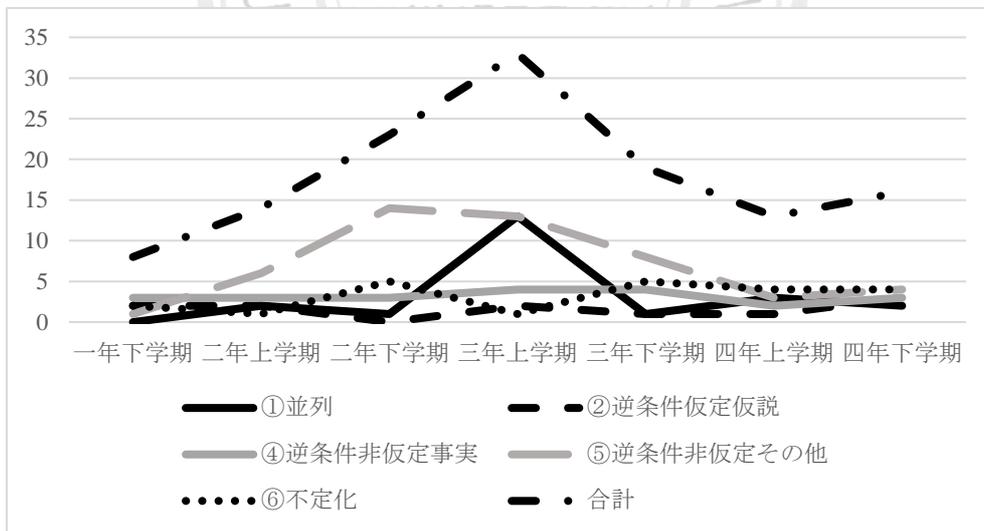


図 1 期間と用法から見た「ても」使用数のグラフ⁶

⁶ 図 1 のグラフには使用されなかった③逆条件仮定反事実と誤用を含めなかった。

表 6 学習者個人と用法から見た「ても」使用数

用法 学習者	誤用	①	②	③	④	⑤	⑥	計
		並列	逆条件 仮定 仮説	逆条件 仮定 反事実	逆条件 非仮定 事実	逆条件 非仮定 その他	不定化	
L5	0	1	0	0	0	6	0	7
L6	0	5	0	0	0	4	1	10
L8	1	0	0	0	2	3	1	7
L9	1	2	0	0	2	2	1	8
L10	0	0	0	0	1	3	0	4
L14	1	2	0	0	4	1	0	8
L20	0	0	0	0	2	4	0	6
L21	0	0	0	0	4	5	0	9
L24	1	2	2	0	2	3	1	11
L25	1	0	1	0	1	1	0	4
L26	0	2	0	0	1	4	2	9
L27	1	2	2	0	2	4	5	16
L28	0	0	0	0	0	0	0	0
L29	0	1	1	0	0	2	1	5
L30	0	2	1	0	0	4	4	11
L34	0	1	4	0	1	3	4	13
L35	1	2	0	0	0	0	2	5
計	7	22	11	0	22	49	22	133

5. 考察

各回の作文テーマはあらかじめ定められたものだが、構成や内容は学習者自身の考えによるものであり、個々人の接続表現「ても」の使用数にはばらつきが見られた。以下では、学習者の全体的な使用傾向を明らかにするため、縦断的な変化、使用の適切さ、使用された用法の観点から結果について考察を行う。

5.1 縦断的な変化

全体の使用数から見ると、一年次下学期から徐々に増加し、三年次上学期が最も多く、その後は減少するがほぼ安定している。最も多い三年次上学期でも、一人の学習者が書いた5篇の作文で2回使われる程度である。図1を見ると、全体数が中盤で増加している実質的な要因は⑤逆条件非仮定その他にあたる例が二年次下学期と三年次上学期で多く見られたことだと考えられる。後の用法の観点でも触れるが、①並列は数字の上では増加しているものの、二つの語を重ねて使われている例があるためである。そのほかの②逆条件仮定仮説と④逆条件非仮定事実は横ばい、⑥不定化は後半になってやや使用数が増えている。

本調査では、「ても」の使用数は学習者のレベルが上がるにつれて増えていくわけではないことが示された。

5.2 使用の適切さ

学習者の用いた接続表現「ても」はほとんど正しく使われており、誤用と判断されたのは約5%である。学習者はどの段階においても「ても」を適切に使えていると言える。誤用と判断された例⁷を通して不自然な使用を見ていくと、こうした例では「ても」が過剰に使用されている傾向にある。まず、本来使うべき表現の代わりに「ても」が使用されている例が見られた。(9)と(10)では「たら」あ

⁷ 文意が読み取れなかった一例を除く。

るいは「と」の使用が自然に思われる。

(9) そんな差別は考えても不思議だと思います。(L14-21)

(9) ' そんな差別は考えてみたら／みると不思議だと思います。

(10) 外観から見てもきれいだが実際的にどんな危機が潜んでいるか分からない。(L35-28)

(10) ' 外観を見たら／見るときれいだが、実際にどんな危険が潜んでいるか分からない。

学習者が(9)で「考えても不思議(わからない)」、(10)「外観を見るとききれいでも」ということを意図していると考えれば、「期待に反する」というニュアンスを持たせたかったことは感じられるが、やはり不自然に感じられる。一方で、「ても」がないほうが自然な例(11)もあった。

(11) お正月の行事はいくらあっても、私の目にはそれはただ宗教的ではなくて、家族の愛情ももっと強くつなげるとのことだ。(L25-11)

(11) ' お正月の行事はたくさんあるが、私の目にはそれはただ宗教的なものではなくて、家族の愛情をもっと強くつなげるものだ。

そのほかに、動詞と「も」を「て」で接続したが適切ではなかった例(12)(13)が見られた。こうした例では、「ても」過剰使用の裏に母語の負の転移の影響があると思われる。母語である中国語では「も」にあたる「也」の位置は日本語よりも制約を受けにくい。陳(2013)は中国語において「ても」にあたる要素は「也」であり、「也」が現れないこともある点が困難点の一つだと述べているが、

「ても」産出においては、「也」と「も」の現れる位置が一致するとは限らない点も「ても」の正しい使用を妨げているように思われる。

- (12) (夜市について) 台湾なりの食べ物は全部入っても言えるのである。(L8-28)
- (12) ' 台湾ならではの食べ物は全部あるとも言えるのである。
- (13) それを毎日持って歩いてても不便なので、分からない言葉があっても辞書がなくて仕方ありませんでした。(L24-17)
- (13) ' それを毎日持って歩くのも不便なので、分からない言葉があっても辞書がなくて仕方ありませんでした。

そして、「でも」と「ても」の混同(14)が見られた。動詞を使う場合には「ても」が使用されるが、一部のイ音動便動と撥音便の動詞、名詞あるいは形容動詞を接続する場合には「でも」を使用しなければならない。この点について、導入の際に言及する必要があるように思われる。

- (14) たとえ便利しても、食べすぎると体に悪くなる恐れがあるから、ちゃんと気をつけるものだ。(L27-28)
- (14) ' たとえ便利でも、食べすぎると体を壊す恐れがあるから、ちゃんと気をつけなければならない。

以上、誤用と判断された例においては「ても」の過剰使用の傾向が見られた。「たら／と」の代用としての使用、「ても」が不必要な場面での使用、母語の負の転移と見られる「て」による動詞と「も」の不適切な接続、「でも」と「ても」の混同が見られ、「ても」学習

上の困難点となっているようである。

5.3 用法

以下では、使用された用法の観点から学習者の「ても」使用について見ていく。

5.3.1 並列

①並列の用法は学習者が読解の授業で使用していた教科書で主要な文法項目として扱われない。平均的には学習者が 33 篇の作文を書いても 1.7 回しか使われない結果となった。本調査では、(15) のように意味の似た語を重ねた場合、それぞれを並列として扱った。図 1 では三年次上学期に使用数が急増したように見えるが、このような例が一文の中で使われ、それが複数確認されたためでもある。

(15) そんな生活のために、苦しいても、寂しいても私は我慢するつもりだ。(L35-20)

①並列は三年上学期に多く見られたが、初期と後期での差も大きくはなく、ほぼ横ばいであると言える。

5.3.2 逆条件

①並列、②③④⑤逆条件、⑥不定化の中では、逆条件が最も多く使用されている。このことから、学習者は「ても」の中心的な用法を理解し、実際に使用していることがわかった。逆条件に限ってみると、仮定②③よりも非仮定④⑤に分類された例が多い。峯(2007)では学習者の使用する接続辞表現は事実的なものから仮定的なものに発展していくと指摘されているが、鄭(1993)では「ても」を理解する際の困難点として、実現済みの事態を表す用法が挙げられており、理解する際に困難であっても、産出する際には仮定的な内容よりも実際に起こったことのほうが産出しやすいということになる。

この点について、本調査の結果を見てみると、未実現の事態を表す②と実際に起こったことを表す④では、事実が仮定の二倍という関係を保ったままどちらも安定して出現しており、未実現の事態を表す②は実際に起こったことを表す④のおよそ半分しか出現していない。学習者にとっては実現した事態のほうが産出しやすいことが窺えるが、この点については内容との関連性も無視できない。表2に整理した作文テーマのうち、全33回のうち未来のことをテーマとしているのは4、7、8、9、25の5回であり、過去のこと述べているのは2、5、6、10、16、21、33の7回、残りの21回についてはどちらも言えない。全体として、過去の出来事を元に作文を書いていることが多かったことも、実現済みの事態を表す④が②の未実現の事態より多いことに影響していると思われる。

③逆条件仮定反事実に分類された例は見られなかった。③は起こりえない事態について述べる場合に使われるが、使用できる文脈が限られるためではないかと思われる。⑤逆条件非仮定その他が多く見られた。一般条件や恒常条件、反復して起こる事態、習慣のほか、連体修飾に含まれる「ても」を⑤に含めたため、この用法に分類された例が多くなったものと思われる。作文の性質上、あるテーマについて自分の意見を述べることが主となるため、ある事柄を前提とし、学習者がそれに反する考えを述べる際に「ても」が使われることが多いようである。初期から中期にかけて使用数が増加し、二年次下学期と三年次上学期での使用が多く、その後はやや減少していた。

5.3.3 不定化

⑥不定化の用法も①並列と同じく33篇の作文において平均して2回程度の使用となったが、後半になって使用数が増えており、比較的よく使用している学習者、数回使用した学習者、全く使用しない学習者がはっきりしていた。

表7は用法ごとの特徴と縦断的な変化について整理したものであ

る。

表 7 用法ごとの特徴と変化

用法	使用数と特徴	縦断的な変化
誤用	全体の約 5%を占める。 「ても」の過剰使用見られた。	ほぼ横ばい。
① 並列	⑥不定化と同程度の使用数。	三年次上学期に多いがほぼ横ばい。
② 逆条件 仮定仮説	使用数は④の 1/2。未来のことを書く テーマが少ないことが影響している と見られる。	ほぼ横ばい。
③ 逆条件 仮定反事実	全く使用されていないかった。	—
④ 逆条件 非仮定事実	使用数は②仮定仮説の二倍。作文の テーマと性質上、すでに実現した事 態が多い。	ほぼ横ばい。
⑤ 逆条件 非仮定 その他	最も多く使用された項目。作文の性 質(主張の論述)による影響を受けて いると思われる。	初期から中期にかけて使用数が 増加し、その後はやや減少してい る。
⑥ 不定化	①並列と同程度。個人の使用傾向は はっきりしている。	後半の使用数はやや増えている。

以上の考察を踏まえ、教育現場への提言として四点を挙げる。初中級レベルの作文指導で誤用における過剰使用を抑えるために、導入の際には「ても」には常識や社会通念に基づく期待に反するというニュアンスがあることを説明し、扱う例文においてそれがどういった期待なのかということ意識させることが重要だと思われる。また、その際に中国語の「也」の影響を受けやすいという点は補足が必要である。そして、名詞や形容詞を用いる場合には「でも」を使わなければならないことや、「も」を含むその他の用法もあわせて確認する必要がある。並列用法については主要な文法項目として扱われることはないため、聴解や読解によるインプット教材を活かし、使用例が出てきた時には並列用法について説明することで逆条件と区

別しやすくなるように思われる。

6.終わりに

台湾人日本語学習者の「ても」の使用状況を明らかにするべく、「LARP at SCU コーパス 2022」を用いて学習者の使用した「ても」の分類を行い、縦断的な変化、使用の適切さ、使用された用法について考察を行った。「ても」使用数には個人差があるが、全体では一年次下学期から三年次上学期にかけて増加し、その後は減少した後、ほぼ安定して使われていた。増加の主な要因は⑤逆条件非仮定その他の増加であった。適切さについては正用が約 95%であり、学習者はどの学習段階においてもほぼ「ても」が正しく使えていることがわかった。不適切な使用においては「ても」の過剰使用が指摘でき、「たら／と」の代用としての使用、「ても」が不要ない場面での使用、母語の負の転移と見られる「て」による動詞と「も」の不適切な接続、「でも」と「ても」の混同が見られた。用法については、①並列、②③④⑤逆条件、⑥不定化の中で、逆条件が最も多く使用されており、学習者は「ても」の中心的な用法を理解し、実際に使用していると言える。逆条件に限ってみると、仮定②③よりも非仮定④⑤に分類された例が多いが、これは作文のテーマとも関連があるものと思われる。未実現の②と実際に起こったこと④は 1:2 の関係を保ちながら安定して出現していた。

以下の二点を今後の課題とする。まず、本稿では学習者の「ても」の使用を縦断的に観察したが、使用例の内容の考察を行うには至らなかった。本調査で抽出した「ても」が使われている状況が「期待の内容」では A と B のどちらのタイプに属するかを見ていくことで学習者の「ても」の使用状況をより詳しく知ることができると考える。また、冒頭で学習者の「ても」使用が安定していないと述べ、「ても」の代わりに「たら」を用いる、あるいは逆接の事実を表す際に「ても」以外の逆接表現形式を用いることがあると述べた。実際に学習者が「ても」を使用していないという点については学習者

だけでなく母語話者のデータを含むコーパスを用いて対照的に見ていく必要がある。

参考文献

- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク
- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク
- 田中寛（1988）「逆接の条件文<ても>をめぐって」『日本語教育』67号、pp.139-158
- 田中真里（2005）「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』東京：くろしお出版、pp.63-82
- 陳昭心（2013）「テモの不使用についての一考察—中国語の母語干渉の観点から」『日本語／日本語教育研究』4 東京：ココ出版、pp.231-248
- 鄭亨奎（1993）「条件の接続表現の研究--中国語話者の学習者の立場から」『日本語教育』79号、pp.114-125
- 日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法6 第11部 複文』東京：くろしお出版、pp.146-150
- 前田直子（1993）「逆接条件文「～テモ」をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』東京：くろしお出版、pp.149-167
- 前田直子（2009）『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』東京：くろしお出版
- 峯布由紀（2007）「認知的な側面からみた第二言語の発達過程について—学習者の使用する接続辞表現の分析結果をもとに—」『日本語教育』134号、pp.90-99
- 宮崎聡子（2014）「日本語学習者による「ても」の理解に関する一考

察一中国語母語話者への質問紙調査をもとに一」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 37 号、pp.113-127

用例の出典

「LARP at SCU コーパス 2022」

<https://sousyuus.herokuapp.com/Grammar>

国際学友会日本語学校（1996）。《進學日本語初級Ⅱ》。臺北：大新書局。

